

今日は、国立のハンセン病療養所「菊池恵楓園」のお話です。

ハンセン病は「らい菌」に感染して起こる病気ですが、「らい菌」は感染力がとても弱く、現代では感染することも発病することもほぼありません。万一、発病したとしても、適切な治療により完治するようになりました。

しかし、治療法が確立された後もなお、感染者は、国の政策によって強制的に家族や地域と引き離され、療養所に収容されました。その政策は、一九九六年の「らい予防法」廃止まで、およそ九十年にもわたったのです。隔離されたまま一生を終えた人も少なくありません。

そんな療養所の一つが、熊本県合志市にある菊池恵楓園です。敷地内には、ハンセン病問題を次の世代に伝える「歴史資料館」があります。

館内に入ると、かつて、園を囲んで外界と隔っていた「隔離の壁」の一部が展示されています。この壁には、入所者が故郷を懐かしく思う一心で開けた小さなぞき穴があり、彼らの無念を訴えかけてきます。

資料館の企画に携わった学芸員の原田寿真さんは、「資料館の

基本理念は『あなたは私』『私はあなた』。来館者も入所者も同じ人間です。この理念には、『自分事としてハンセン病問題を考えたい』という切実な願いが込められているのです。』と語ります。

展示の内容や説明文などは、全て、今もここで暮らす入所者の方々と共に考えたものだそうです。

中には、後遺症で物がまぶしく見える患者の視覚を体感できるコーナーもあり、展示資料に触れることで、知識として知るだけでなく、体と心でハンセン病に関する様々な問題を感じ取ることで、できるように工夫されています。

訪れた人からは、「入所者の心情がよく分かった」「頭ではなく心で理解できた」との声があり、中には「こんなにもひどい隔離の歴史があったのか」と涙する人もいるそうです。

いかがですか。

人として当たり前の暮らしが許されず、人権を奪われたまま生きてこられた入所者の方たち。そして御家族もまた、厳しい差別や偏見に苦しんできました。その人生とハンセン病問題の歴史を知ること、私たちは、人権が尊重される社会の大切さを実感できます。

歴史資料館の様子はインターネット上でも見る事ができます。「菊池恵楓園バーチャルガイド」と検索してみてください。

では、また。